



## 伊勢 桃代

いせ ももよ  
1937年生まれ。慶応大学卒業。シラキユース大学大学院修士。69年国連本部に勤務。85年国連本部研修部部長。88—89年国連大学事務局長。97年国連退職。97年—2004年アジア女性基金専務理事。

一九九七年、私は二十八年の国連での仕事を終え帰国した。帰国してまもなくアジア女性基金の専務理事兼事務局長の仕事を引き受けるよう依頼があった。この仕事の難しさと辛さについては、私の先輩や知人・友人の周知のことであり、反対が多かった。こういった事情にも拘らず、お引き受けすることにした理由は多くあったが、次のような背景があったからだと思う。

既に中学の頃に日本人慰安婦の悲惨な状態については読んでいたし、国家の権力の下に戦争が起こり、自分たちではどうしようもなく人生を動かされた女性の凄惨な生き様の報告はずっと心に残っていた。女性と性の問題は男性の権力とも深い繋がりがある上に、性についての社会的ノームを犯したとみなされた者、それが国家権力やなんらかの権力で強要された犠牲者であっても、生涯偏見と差別の対象とされてきた。よって、慰安婦とされた方々はごく若い時の限られた時限での過酷な現実を、一生ひきずって生き高年齢となった人々である。戦後五〇年たっても、政治・世論の両面から行き詰まりをみせていた「慰安婦」問題につき、基金は苦渋の選択の末設立

され、被害者個人への直接の事業として、又国民と政府との二人三脚の事業という新しい考え方に基づいて組織化された。私はこれらの努力と組織の考え方に賛同した。また、他の観点からも、基金に参加することを決めた。それは私が国連に勤めていたことと関連する。長年国連から日本を見ていた結果、日本とアジアとの関係についての懸念があった。矛盾に思えるかもしれないが、国際社会に出ると、国際公務員であるという意識と同時に、自分が日本人であることを常時自覚せざるを得なくなる。その結果、日本人として日本を外から見ていることは、日本とアメリカの緊密さ、ヨーロッパとの微妙な関係であり、同時に日本のアジアからの疎遠とも云える関係であった。戦後処理やいわゆる慰安婦問題は、日本とアジアとの関係の重要な部分を形成していて、これからの日本の在り方を模索するのに欠かせない問題であると考えていた。

もう一つの国連との関係では、元々経済・社会理事会の分野を専攻したため、冷戦下での国家という権力の下に被害者とされた人々の問題にもかかわった。そして冷戦後の武力紛争と内紛状態の中で女性・子供に対する暴力と民族浄化の犠牲者の癒しと名誉の回復の課題についての研究に接した。国連は犯罪者の責任の追求の方法の模索に乗り出したが、前述したように、女性と性と暴力の問題には社会的偏見と差別が付きまとい、被害者は更なる二重三重の被害を被るのが大半であった。こういった観点からも慰安婦問題に関わったと思う。

心に残っている出来事は実に多いが、アジア女性基金の終了にあたり、特に望みたいことをここに付記したい。償い事業の成功・不成功は、限られた時限でのアジア女性基金の事業のみで測るべきではないと考える。基金は、連立政権下での与党三党が合意し、それなりの予算を国会が承認し出費してきたにも拘わらず、政府は国内においても、国際的な場においても償い事業の明確な説明をしていない。その根本的な理由として挙げられることは、戦後処理に関する議論を進展させず、国としての理解や立場を整理してこなかったことによる国家としての合意の欠如である。戦争に関する個々の意見の違いはあるが、国家としての基本線を明確にすることなくして国民的な運動は出来ないのである。リーダーシップとは、国をまとめる役割を担うことであり、国を二分することはない。償い事業が世論を動かすまでにいたらなかったことの原因はここにあると思う。と同時にこの状態は日本が国際的にも、アジアの中でも孤立する原因であろう。政治が「未来のためにある」のであれば、基金の事業から教訓を学んで頂き、日本の未来の役に立てていただきたいと望むものである。